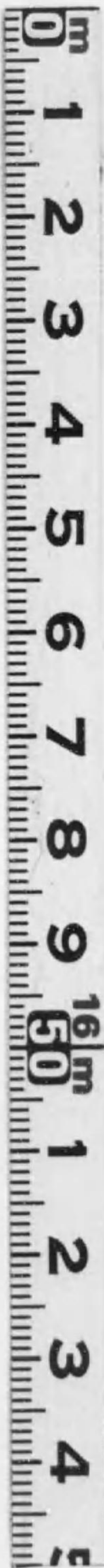


516

309



始



15.10.13

T

詩集
戀 つ は
著 虹 柳 路 川



516-309

碑銘（序詩）

うつろひやすきこゝろを
消えがてのねがひを
時さればかへらぬ聲を
いつも充ち溢れたるふきあげ、
わかうどのをのゝくむねに
彫りつけよ、生ける^魂もて。

例言

既刊の小曲詩集「はつ戀」の全部と「蘆の笛」「温室の花」の一部を加へてこの小曲詩選を編む。余の過去十年に涉つての抒情小曲の抄である。「はつ戀」は過般の震災によつて紙型全部を焼失し再び刊行のこと書肆に於て不可能となつたためこゝに殆んど全部を收めることにした。そして詩選の名もこの舊名を冠した。うつろひ易い青春の追憶とまたいつも青春の心に生きたい憧憬とをもつて、若き人々の愛誦にふさはしい詩を一巻となしたものがこの詩集である。

大正十四年一月

著者

目次

はつ戀

はつ戀	三
かぞへ唄	九
うはのそら	一五
わが唇	一六
ひなげし	一七
なみだ	一八
すぎたその日	一九
ひとりごと	三〇

はじめてのくちづけ	二二
にほひ	二四
淫れごころ	二五
こともなき日	二六
断章	二六
夕となれば	三一
桐の雨	三三
春のよひ	三五
春宵	三六
はつなつの風	三八
はつ夏	三九
ばら	四〇

II

海の小唄

海の小唄	四三
葦の笛	四一
異國	四二
梟	四三
いたどり	四四
草の實のとぶ日	四五
月	四六
ぐみ	四七

III

あまぞら

ゆく春	六二
宴	六二
ほぶら	六一
あをぞら	六一
わかれ	六一
あざみ	六一
月見草	六七
影	六九
秋の雨	七一
木犀	七二
うらみごと	七五
老嬢	七七

IV

花暦	七九
みづひき	八六
りんどう	八七
白粉草	八八
やなぎ	八九
銀座の雨	九〇
牛込見附	九三
かりそめごと	九五
あひびき	九七
會話	九八
林檎	一〇〇
あひづ	一〇

V

床

..... 101

春より秋

しらゆり

あささむ

かへりばな

ながし

都の秋

おそなつ

戀ごころ

うつりゆく愛

木の實

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

仇しごころ

戀の秋

あきつ

こほろぎ

なさけ

しんじつ

洞落

浮き草

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

にがき盃

ヒロオの悲しみ

にがき盃

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

網わたり	一六六
玉のり	一六八
江川にて	一六九
くぜつ	一七〇
うそ	一七一
いつはり	一七二
人妻	一七三
冬の歌	一七四
僧	一七五
冬	一七六
あくび	一七七
乞食	一七八

おろかなるもの	一五六
絶望	一五七
忘却	一五八
嗟嘆	一六〇
雨の日	一六一
松が枝	一六三
春の雪	一六〇
ほろゝひ	一六九
無題二章	一七一
つばさ	一七一
鏡	一七四
ゆめ	一七五

蘆の笛

春宵	一七九
春の風	一八一
春の丘	一八三
夜の鶯	一八五
春のゆくへ	一八七
ゆく春	一九九
蘆の笛	九
夏の河岸	一九四
ハアモニカ	一九七
海月	一九九

牡蠣の殻	101
けむり	104
はつ秋	106
冬のおとづれ	109
病院の窓	110
流星	111
秋の歌	112
電鈴	116
番紅花	119
とほくゆく雁	120
ニコライの鐘	122
煙草の唄	125

美しきひとびとにおくる……………二七
 雪ふる夜の断章……………二八
 青い鳥……………三三
 獨樂……………三三

温室の花

古い春の唄……………二九
 枳殻垣……………二九
 「春」の無線電信……………三三
 浴槽……………三四
 山雀……………三八
 草笛……………四八

屋上園の春……………五一
 月見草……………五四
 私の村……………五七
 海邊の別荘……………六〇
 薔薇……………六三
 時計……………六五
 馬の鈴……………六七
 聖夜連禱……………七〇
 俳畫題讀……………七二
 雪のポスト……………七四
 犬橋……………七六
 雪の朝の印象……………七八

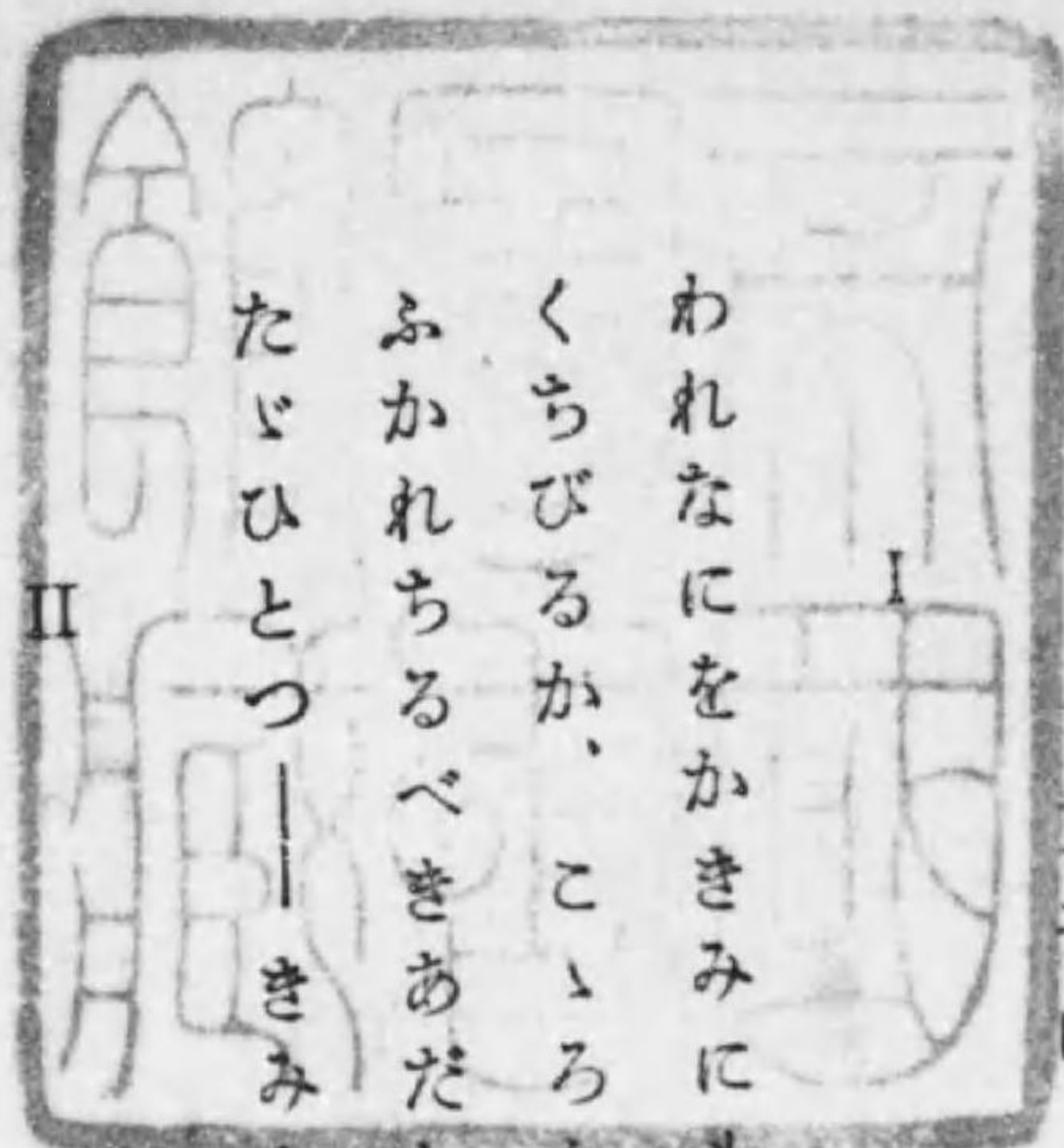
516-309

はつ戀

—目次—

舞ふる夜……………	二八一
傳奇小説の夜……………	二八四
鷓鴣……………	二八七
洗濯婆さん……………	二八八
小鳩……………	二九〇
てるてるぼうず……………	二九一

かくもいたみてわれはなき



われなにをかきみにもとめむ、
くちびるか、こゝろか、かせに
ふかれちるべきあだしごゝろか、
たゞひとつ—きみをわするゝこゝろこそ、

はつ恋

— 子に

— If fair enough to earn
Your love, so much is all my love's concern "
My love grows hourly, sweet.
"Mine too doth grow,
Yet love seemed full so many hours ago!"
Thus lovers speak, till kisses claim their turn.

— Rossetti



えうもなきおもひごととしてひをおくる。
うつばしらをつたひゆく
あめのおとにもこゝろをののき……。

III

おもふとさへものたまはず。
しづかにあでにほゝるめる
かなしく、にくききみがゆめ
ひるのうちにもきえずのこれる。

IV

われはこゝろのそこのかりうど、
きみのこゝろのなかのかりうど、
ふとめをもそらしたまへる
たまゆらもひそにみはれる。

V

もしきみのあのとひそめて
わがむねにしのみたまはゞ
くらきよもあかるむまでに
ひをさゝげひもてやきなむ。

VI

よるくればこのなやましさ
 みぬちやきほのほはくらむ、
 まぼろしにたゞゆめにのみ
 くちびるを、てをかしたまへ。

VII

きみとあふかたときに
 われはかなしきおしとなる、
 ねがはくばめにかゞやける

たえぬほのほのことばをばよみたまへ。

VIII

いつはりのみ、いつはりのみ、
 わがよむうたはいつはりのみ、
 くるひしぬべくしにもえぬ
 なほもはげしきあいよくのみつれば。

IX

をさなきちをもわかしむる
 はつこひのひのかなしさよ

かたみにもえてはにかめる
ばらのいたまし。ちるひおもへば。

X

ちるべきはなはちらしめよ、
さくはなならばさかしめよ、
なみだにぬるゝそらにゆふづき
ものおもひするむねにふくかぜ。

かぞへ唄

□

みづはながれてこゝろよし、
こひはうたひてみにあまし、
わかきひのさちくれぬまに
すなどりほさんこひとよ。

□

くちびるもえてめはゑひて、

むねやはらかなみだする
こじかのごときこひびとよ、
いばらふむともなにかせむ。

□

はとのごとくもうれしげに
かるくあしふむこひとよ、
さちはむねにぞみちたれば
きみのあゆみをわすれけむ。

□

いとやはらかきくさのみき
いとしなやかかでのさはり、
あゝもえたてるそのはだの
たへぬにほひよ、かんかくよ。

□

きみはにほひにみなぎりて
わがかんかくをおぼらしめ、
きみはなさけにみちあふれ
わがたましひをころすなる。

□
そのくろかみによをかけて
ひになげうつもなにかせむ、
もゆるくちにはよのなかの
まことにまさるいのちあり、

□
つぼみのごとくうなだれし
わがむねのへのこひびとよ、
あまりあまさのみにおほく

あまりにさちのおもければ。

□
さはうれしみてまなことち
すふにまかせしくちびるよ、
こどりもゑひてゆめになき
つきはねむりてきにあかし。

□
かたることばのもどかしき
むねのおもひをたぐるとき、

ほんとうでし

きみよ、しづかにてをとらむ、
めのことばこそまことなれ。

□

なみだながれてゆゑもなく
よりそひなげくこひとよ、
ひあしみぢかくにしにゆく、
かへらぬさちをとみにくみなむ。

うはのそら

足もとの薔薇を踏んでもうはの空、
縫針に手を刺されてもうはのそら、
石につまづきかつ走る、
君をおもうてうはのそら。

何んぞと云ふ、形なき海白う？

わが唇

ちゆりつぶの紅き花びら、
血のいろに焼くる花びら、
狂ひ死ぬまでさしあてむ、
それよりも燃ゆるわが唇。

ひなげし

わたしの好きな雛罌粟よ、
をとめのやうに燃えてゐる。
いつも欲しいかくちづけが、
五月の風にひなげしよ。

なみだ

おもひでもいまはかとなり、
なつかしきまぼろしもきえたり、
のこるはたゞなみだ、げに
なみだのみきよかりし

すぎたその日

すぎたそのひを
なんでもうらまむ、
うゐきようのにほひのやうに
かなしくもうつくしければ。

欠

ひとりごと

われのおもひはうつくしき
あのひとならでさとりえじ、
ないしよばなしもしんじつも
あのひとならでしよんがいな。

欠

桐の雨

けふもけふとてきみはこず。
くらい雨のみふりまさる、
桐のひろ葉をおとづれて
青い五月がしとしとゝ
木の芽の匂ひいたましく
鬱憂をのみうちそゝぐ。
わかき男のかなしさは
ひるのなやみのたへがたく

かはける口に笛をふく、
桐の雨のみふりまさり……。

春のよひ

いだきしめたき春の宵、
ひとりにをしき春の宵、
おもひはたせばをしまるゝ
こゝろのこりのはるの宵、

春宵

春の夜の温かさ、匂はしさ、もどかしさ、
女の手をば四方しほうにかんずる、
柔くやさしく力をこめて抱きしむる
女の手をば感ずる、
ひとりみの血のおほきせうねんに
むせび泣きたき夜よるの空気
かはける胸におとなふひともしなき部屋へやのうち
おもひこめたる眸まゆもて窓の硝子びょうしに

うるめるひかりをなげかくる緑の星……
さくらは遠くに匂ひ、草花くさなのほめきもきこえ、
わが身ぬちをはしる血のおと
たへがたく皮膚も花と匂ふべし、
春の夜の温かさ、匂はしさ、もどかしさ、
たゞひとりさみしくなぐさむる空そらしき夢に、
女の手をば四方に感ずる。

はつなつの風

簾が池のおもてに騒いで
風がそつと月夜をぬけてきた、
蛙の歌がころろ、ころろ、
青い絹張りの空に流れる。

もの影が胸にさわいで
なにかしら來ねばならない夜
じれつたい待つ身にそつと
風が月夜をぬけてきた。

はつ夏

初夏のうれしさ、
ものすべて輝くうれしさ、
草に臥し、煙草ふかせば
世は緑、きみは若人。

ば
ら

ばらのはな ばらのはな
いつもさちあるばらのはな、
こひになやみにくちつけに
いつもなやめるばらのはな、

海
の
小
唄

欠

— J'irai sur la grève te jeter
mon baiser
Le vent vient de mer, ma mie,
il te rapportera.

— Paul Fort.



欠

草の實のとぶ日

草の實のとぶ日はかなし
日の赤く空ににじみて
雲くらき夕べはかなし
母ゆきし日の眼にもうかべば。

月

そのよひは月の明るく
まつが枝えをもれてさしきぬ。
母ゆきしへやにさみしく
燭あかりともしなげくわが頬ほに。

ぐみ

わがみるは赤き茶ぢ莫みの實み
雨に濡れけふもしたゝる、
母ゆきてかへらぬまどに
雨に濡れけふもかゞやく。

あをぞら

Le ciel était trop bleu, trop tendre
La mer trop verte et l'air trop doux.

— Verlaine

ゆ
く
春

なやましい椿が落ちる、
血のやうな椿が落ちる、
なやましい午後が光る、
薄色の春が逝く。——
血のやうな椿が落ちる。



宴

いざ乾したまへ盃を
若い日とても過ぎてゆく、
ひと花の咲く尊さも知らずして
翰林の子はものをおもふや、

ほぶら

ほぶらが、青いほぶらが
風もないのにひらひらと
琥珀の空にうち顛ふ、
甘い言葉をくりかへす
胸のやうにもはづかしく
琥珀の空にうちふるふ。

あをぞら

あをぞらはかなし、
あまりにあをし、
あまりにはるけし。
むねよせてくちとくち
あはすあまさにわれはみる、
きみがめにうつるあをぞら。

わかれ

白^{しろ}き月風^{げふ}にうかびて
葉^はなみみな銀^{ぎん}にちらばふ、
たゆたへる心ごゝろに
更^かくる夜^よの悲^{かな}しきわかれ。

いくたびか唇^{くちびる}はあはせど
もるゝ息^{いき}せつにまされど、
時はたゞ酔^よへるひとみに
嘆^{なげ}きをばのこしゆくのみ。

あざみ

(花のおもひでー二)

よのうれひ身にはおほくて
おほかたは忘れはてたる
おもひでのをさなき戀路。
おぼろかの記憶たどりて
かたらひし眼をおもへど
すがたさへ胸にうつらじ、
たゞおもふ二人すわりて

道のべに手もていぢりし
とげおほきあざみの花を。

月見草

(花のおもひでー二)

とほうみのしほのとゞろき、
やまのはに紅きゆふ月、
草やまに夏の香をかぎ、
ひそびそとひとにかくれて
かたみにぞくちづけあひし

或る宵のゆめのおもひで、
そのをとめいまはさかれど
わかき胸すでに老ゆれど
なほうかぶわが肩ごしに
きえてちる夢とゆれにし
おほきなる月見草の花。

影

暗い夜に蘆のさわぐは
まことに悲しきものゝ潜めば、
暗のしめる草間に水のひゞくは
まことに悲しきことあればぞ。
更けし夜に晝をおもひて
さまざまに嘆くはつらし。
影のこゝに落つれば風はいつも騒いで
銀鈴をふるほどもない蟲のこゑ

また樹々をよび交ふ靈の懸巢鳥
夜の秘密の大空にさては優しく
ありし日のきみがおもひの眼にも湧く、
しづかなる涙、しづかなる歌の一ふし。

秋の雨

雨はやはらかに露臺のうへ
雨はしとやかにしとやかに夜をこめてふる。
園の叢に息のごとく
紅き蜀葵、手をさしのべば顫ふほど、
秋は微かにもものゝ影をしく。
しとやかに、しとやかに露臺の上、
忘れぬし人を悼むがごとく若き心に、
つれなき憐みを誘ふひときよ。

濡れて、ぬれて心もしつとりと
今宵はたゞ泣きたし。

木犀

あへずにかへる夜のそゞろ歩あゆきに
木犀の香りは沁む。

薄月夜の青さに沈しづまる池のほとり、
とゞろく響は街のどよみに
なほさらはげしく胸にふるへば
静かな夜よるの甘さは憎にくさも憎しよ。
絹よりも軟らかな空氣に抱きしめられ、
唇くちびるはだありあよりも燃えて息する

欠

逢へずにかへる夜の木犀
盗み足して——落ちる銀の花。

欠

りんどう

むらさきのりんどう、
たにがはのくさむらにさきでた
りゝしいりんどう、
りんとしたりんどう、
むかしかたぎのうちにそだつた
ひとりむすめの
むらさきのりんどう。

白粉草

汗ににじんだ手のなかに
いつか萎れた白粉草、
遊女の夢のかすよりなほ淡き
白粉のはな、戀のはな。

やなぎ (民謡)

銀座のやなぎにあめがふる、
あをいやなぎにひそびそと
戀びとどしのさゝやきの
しめやかさもてあめがふる。
あをいやなぎはなで肩に
さはるでもなくよりかゝる
「春」の女のもつれあし。

銀座の雨

なつかしき銀座の雨、
春さきの冷さに
夢とけぶれる柳の芽、
瓦斯のあかりに吐息する。

整石を華奢な毛皮の裾曳きて
靴音高く、若き異人の夫婦づれ
流行の帽子眼ぶかに過ぎゆけば、

蛇の目斜めに足駄の音もいと軽く
竹川町の角を入る婀娜な島田の懐しさ。

電車の鈴も騒がしからず、辻々の
ものおともいと快くうち濡める。
パウリスタには熱き珈琲の煙り立ち
すこし鄙めくピアノラも軟らかに
踊の曲を打ち鳴らす。

窓を細めに明け放ち
ふたり静かにさしむかひ、

フリヂアの鉢いぢりつゝ
さてもきく銀座の雨のなつかしき。

牛込見附

夏葉やなぎのふかみどり
夏葉やなぎはさはやかに
浅瀬の船にたれさがる
橋のたもとにひとを待つ
女の髪にたれさがる、
心みだすは夕かぜの
なかにひとときは赤いシグナル、
とんでゆきたやこのまゝに

電車の笛の鳴るかたへ——
たそがれの山の手つゝむ霧のなか。

かりそめごと

うすむらさきに空が暮れ、
橙いろに灯がひかり
水がしづかにゆらめけば
こゝろときめく池の端、
人にかくれてあひどきの
あまさおぼえたそゞろゆき、
けふもあくがれきみをまつ。
うすむらさきに空が暮れ、

橙いろに灯がひかり
水がしづかにゆらめけば
こゝろときめく池の端、
橋のたもとに待ちわびて
ゆくさくるさの二人づれ
見やる心のもどかしさ。

あひゞき

ふたりには、暗い街まちのたのしさ、
明るい家のわきまできては
またひきかへす廻り道、
つかのまをながくたのしむ
かずかずのくちづけ。

會話

『おつ母さんにはないしよで
ちよつと用をこしらへて
こゝまできたの、こんやは
——そんなとくまではいや、
たゞふたありでこゝで
おはなししてればいゝの、
だまつてゐてもいゝの、
だのに、あなたは』

なぜつまらないとおつしやるの……』

そらはうすぐもり
どこかで心細ささうに
笛がなる、——

『雨がふりさうだ、かへらうよ』

林檎

卓上にひとつ残つた

かなしや林檎

眞紅に燃えた林檎、

冷たいふでさつさと切つたらさぞよかる、

かへす刀でそなたの胸を刺したら

さぞよかる、

酔ひざめを、風がふきそろ。

あひづ

宵のとぼそに灯をおいて

ひとを待つたはむかしのこと、

六月の夜のハーモニカ

わかき少女は街にでる。

春
よ
り
秋

Bientôt nous plongerons dans les froides ténèbres ;
Adieu, vive clarté de nos étés trop courts !
J'entends déjà tomber avec des chocs funèbres
Le bois sur le pavé des cours.

— Charles Baudelaire



床

床はなつかし、うらめし、
つませちぎりしその夜より、
生まれ、生き、死ぬその日まで、
つらさ、たのしさすべてしる、

しらゆり

はやあさはあをきひかりを
うなぞこのごとくみたしぬ、
たぼすこしゑりにみだれて
のけぞりししろきはだへに
ありあけのひかりつれなし。
めもとちてくちもしぼみて
つかれたるねむりむさぼる
たはれめのはかなきゆめよ。

かへりばな

おどりさくぼたんのはな、
くづをれしそのひまに
はるをいかにながめよ、
まだちのおほきやもめの
さみしさにたへかねて
よしなきみちのひめごと
たのしむをなどてとがめむ、
まゆあをきあとになまめく

めのこびをなどてにくまむ。
はるのよのをとこのゆめに
なつかしきありのすさびの。

ながし

みづの歌のすゞしき
月の夜の蓼れいさく小徑こみち、
湯がへりの場末の町に
きくとなきながしの音ねじめ
冴えゆくさに心ひかれつ。
そは歌のかなしきならず、
哀調あゐてうたの切なるならず、
ひくものゝ糸いとにうかびて

浮き沈むひとの身の上
こしかたもしのばれうれば。

都の秋

I — (都の秋)

都の秋のうすら淋しさ、
鋪石にちる柳の葉を
暮れがたの灯に濕み見るほど、
四十年増のやつれた瞳も心になつかし、
カツフエに灯がつき、
春のうたの洩るれば、
荒むこゝろの甲斐なさに

ふりかへるすぎたその日のおもひで、
冷くなれる風の埃をたてゝは
いつも夢を亂す銀座の街のたゞたゞ悲しき。
雨の日のやうに濡れた薄暮、
電車の憎き音にも沈める
都の秋のうすら淋しさ。

II — (かげの心)

しづかな息の下より、
黄にみだれちる落葉の冷く
暮れがたの灯に濕むを見れば、

河岸の燈かげも街のどよめきも
さてくなやまし。

街をゆく身はいつもかはらね。

街をゆく心はいつか「影」を追ひしか。

女優の華かな顔にひそむ陰影の如く

わが心は耀やかしき舞臺をすぎ

垣間みる横顔に 夜の風の聲をきく。

欠

に
が
き
盃

欠

Wne comes in at the mouth
Aind love comes in at the eye,
That's all we shall know or truth
Before we grow old and die.

— Yeats



ピエロオ 悲しみ

ピエロオの悲しさ。

なんで心にもない風をする、

苦い手傷を負はされて

息ひきかぬるそのひまに

ぐりむまあすか棄氣味か

ひとはしらねば

「いつも御元氣ね——」と

そつと後むくピエロオの悲しさ。

にがき盃

×

かなしきさけのあぢはひを
くらきひにこそおぼえける、
こゝろくるはずもえたゝず
あすをおもひてさめしとき、

あかるきかほにかげさして

まぶたおもげにうなだれぬ、
おもひとどかぬこゝろかと
きかれてなほもうかぬひよ。

×

A jug of Wine, a Loaf of Bread—and Thou
Beside me Singing in the Wilderness.

OMAR KHAYYAM

けふをたのしめさけはかめにと
べるいあのふるきしどんはうたひけり、
けふをたのしめさけはにがきと
たがさかづきにしるしけむ。

×

あめはそともふりしきり
さけはかめにもからとなる、
めのみもえたちひえびえと
こゝろさめたるたそがれよ、

×

ふたりみつむるさかづきに
ふたりのこひもうちしづむ、
あはれよふべきさかづきに

などてつめたきうをはすむ

×

をししづまれるあらしゆゑ、
われはよろこびのみほせる
けものゝごとくこゝろよき
はだかのまゝにふるまはむ

綱わたり

千に一番のかねあひ

もしも首尾よくまゐりますれば

御手拍ち御喝采のほどゝ

口上どほりに撞木をはなれ、

美ごと身は一本の綱のうへ

千仞の谷を左右にひかへて

悠々對岸にたどりつけば

これぞ絶大のはなれわざ。――

されどいつもこゝであやまつ
さては未熟な浮き世の綱わたり。

玉のり

たまをまはすか、ひはひねもす、
足もてまはす、これもなりはひ、
ふとくはりたる股の肉、
波うつまゝに、あはれをんなよ、
玉をまはすかこれもなりはひ、
わかきみぞらを小屋のうち、
ひともおもはずおもはれず、
ひとりさみしく玉まはす、
あはれ、あはれ、玉のりの若き女よ。

江川にて

×
きみはさみしく玉まはす、
わしはさみしく身をくらす、
いづれこの世のなりはひの
をかしきふりのひとつなれ。

×
だんだら服に房ついた

欠

帽子かむれるじようかあよ、
ひよつととぼけた眼のうちに
心もとなき影をみる。
ふざけた真似まねのありたけを
ふるまひつくすじようかあよ、
やけに狂うたよひさめの
あとのさみしさ君ぞしる。

欠

あくび

かぜにちつてしまふはつばならば
どんどんちつておしまひ
ふゆがきてこのまのすきから
たいやうはあつたかくえんがはにてる、
このひのたふといさいはひを
みにしみじみとあびるがよい、
わたしのいのちはこゝろよくあくびをして
このえんがはにながくとよこたはる。

乞食

わたしのけふのさむしいぼけつとは
どうかゞ二まいとはくどう二つ、

それでおひるもたべねばならず

でんしやにのつてかへらねばならない。

ぢべたによごれたあたまをおしつけ

やせこけたてをさしのばすこじきよ、

おまへはこのわたしになにをこふのだ

あたまをさげるにはあたららない、こじきよ、

つめたいひとびとのなかにあつても

はがねのこゝろをもてないわたしだ、

あつたかにしたいねがひはおまへもひとつ、

さああげよう、このどうかを一まい。

おろかなるもの

われはあへぎ、あへぎ
くらきあらしのよをばはせたり、
われはあへぎ、あへぎ、
なにもものもえられず、
くいとろゑとさむさと、
たゞひとつあまきねがひさへ
あえなくもしりぞけられぬ。
われはあへぎ、あへぎ
いづこにかゆかんとはする。

絶望

あらしよ、
みんなちらしておくれ、
こひもちつた、ほこりもちつた、
のぞみもちつた、
さうしてきるものもさみしく、
一せんのたくはへさへなくなつた、
あらしよ、さむいあらしよ、
いつそみんなちらしてしまへ、
このみまでもすつかり。

忘却

ひごと忘るゝうれしさよ、
くるしみの日に重りて
またくるしみのくればとて
ひごと忘るゝうれしさよ、
酒をたうべてうたうたひ
わが世のなげき日にわかつ
いとおろかしき忘却の
われをねむらすうれしさよ、

すぎゆくまゝにおもひでも
ふるきいろにぞ染まりぬる、
われすぎしひをとむらはず
すぎゆくゆゑとことほがむ。

嗟嘆

その日、その日を
盲目めくらのごとくあゆむ身には
風に散らむ心ほしけれ、
さんざんに雨にうたれ
泥にまみれて、
くつるまで、かげのなきまで、
なげくものをして
なげかしめよ。

欠

欠

無題二章

×

おもひでの小徑こみちに

砂をもる忘却、

かへりえぬくるま仲なにのりて

はなを摘む旅の人のみ。

×

われ路に嵐にあひて

帽子をば失ひけらし、
をかしくも人のわらへば、
われ嵐をば笑ひてやりぬ。

つばさ

こゝろはてしなきすゑにはしりて
とどむることのせつなきまゝに
みをあげてきみにまかし、
いとけなきひのさいはひをおもひいづ。
みをあげてはしらむことの
みをきずつけしいたみゆゑに、
あしきよのことわりとしりそめて
さてはさてはうしなひしつばさなるらむ。

鏡

わたしはいつしか處女^{さかめ}となり
わたしのすがたと向ひあひに
いつもいつも影をおとす、

あゝけれども「微笑」は苦しく頭^{かぶつ}を振る、
短い春秋——まだ繰りかへす春秋、
たゞ、そのそこに
すこしばかり鹽の匂ひの沁みたこと、

ゆめ

おもちやをこわしてないたゆめ
しけんをよしてあそんだゆめ
あをいひとみはきばうにもえて
そらのはてのみみつめたゆめ
たゞいちにんがこひしくて
ひごとよごとにないたゆめ
うゑとさむさにおどろいて
このよのさまをしつたゆめ——

蘆の笛

それもみんな
むかしむかしのことゝならむゆめ。

春宵

どこかで山楂子が散る
どこかで鬱金香がひらく

ものの匂ひのあたたかい晩だ、
星は硝子の窓を緑に染めてゐる。

なにかもの足らぬもののあるやうな、
なにかもとめるもののあるやうな、



遠いところからおとづれのあるやうな、
そして、おのづから心も浮き立つやうな、

青春を華やかな香で塗りこめる「春」
その豊かな息が空気に浸みわたる。

どこかで山楂子が散る
どこかで鬱金香がひらく。

春の風

風はさみしく野をすぎる、
風はたのしく野をすぎる、

棘の花のさく小徑、
山羊の乳うる賤が家。

さてはたのしい並木路、
町へとつよく往還に、

裸はだかの木をば芽めぐませて
ふるへる草にくちづけ、

風はさみしい野をすぎる、
「春」をすべてにおくるため。

春の丘

丘かみにたち
きくは潮騒しほざわい、
とほうみの
ひるの潮しほの音ね。

丘かみにたち
みるは玫瑰ばいばい花はな、
色あをき

春のわかばを、

丘にたち

かぐはわか草、

ふるさとの

ひろ野のにほひ。

夜の鶯

——巴里なる小松耕輔氏にささぐ——

春がきたとて鳴いてゐる、

春がうれしと鳴いてゐる、

庭の丁字の薫る夜に

夜の鶯は窓でなく。

春がきたとて鳴いてゐる、

春がうれしと鳴いてゐる、

異國の旅になげく身も
なにか浮き立つこの宵は。

春のゆくへ

追へど果ない

「春」のあと。

人戀ふごとく

丘ゆけば、

血の滴りの

落ちたやう

椿がのこす
「春」の足跡。

ゆく春

草の實は飛ぶ、
空のはて。

草の實はとぶ、
風のなか。

野を焼く煙けいり
とほく過ぎ、

茨いばらの花は
うす白く

惱みうまるゝ
夏の日

草の實は飛ぶ
風のなか。

蘆の笛

きえいるもじのたゆるとも
われはながれにうたをかく、
きえいるひときたゆるとも
あしのかぶえをわれはふく。

よしきり

よしきり

よしきり

青蘆あやかしの

葉づれの

さはやかな

風のなか

玉を研ひるよに

啼なきすぎる。

よしきり

よしきり

切きない心に

どこへ飛とばうと

鳴ないてゐる

絶たえ入る聲は

青い水と空とに。

夏の河岸

風はれて
青蘆あしさわぎ
日はねむる
空のまなかに。
しづかさは
夜よよりふかき
この岸

かしこの汀みぎは

をりからに
くだる川ふね
棹こしの音ねも
たかく水うち、

水けぶる
ゆくへにひくゝ
こゑかれて
なくはよしきり。

かくてまた
ふねも 小鳥も、
あしのまに、かくれ
こゑなし。

ハアモニカ

松の向ふの砂山に
今日も影さす紅と黄の
二つの日傘。

松の向ふの砂山の
かげには光る
海の青。

松の向ふの砂山の
ひるがほの花^{いろ}色づきて
風にうかぶは音^ねも細く
やさしき人の唇^{くち}にする
銀の調^{しら}べのヘアモニカ。

海月

波のまに、まに

海水帽子。

絹で包んだ

花かざり。

波のまに、まに
海水帽子。

うす紫の
あけがたに、

ほんのりひらく
薔薇のやう、

波のまに、まに
海水帽子。

どんな人か

のぞいてみれば、

波のまに、まに
浮きゆく海月

牡蠣の殻

乾潮どきの
沙のうへ、

牡蠣はさみしく
岩にゐる、

波が洗へば
濡れながら、

波ひきされば
真晝なか、

夢をみるよな
岩の牡蠣。

けむり

けむりはほそく

立ちのぼる

朝の河面の

とまり舟。

しぶく氷雨の

蘆の間を

流れながれて

たえだえに

はつるはてなき

空さして

消ゆる煙の

末みれば

明日はいづくの

河の面に

ほそき生活や

たつるらむ

はつ秋

さえざえと

星の流も

きこゆる夜空よぞら

雨かと驚く

庭の木立にわぎの

騒立さわだつ葉なみ……

灯あかりかけ優やさしきランプ

わが見入る

本のうへに、

「秋」を知りげに

とひ来きしは

馬追うまお

緑の翅はなふるはせて

をののく

ひげ……

この夜の
静かさと秘密をば
うかがふごとし。

冬のおとづれ

空は時雨の雲さして
林の色も鈍みはつ、
野づらを走する小颯の
慧しき眼にも、川もせの
水の上にも、黒土の
青菜畑の女にも
「冬」はさみしく偷みよる。

病院の窓

いつもきて鳴く窓の小鳥よ
青空かけてとびあるく、
病める瞳つとみにはるの光りは
すこし痛きを窓の小鳥よ。

流星

噴き上げの空にかなしく
ひとり夜をなげきわぶごと、
われも扉とにおもてをふせて
世に遠き一人をおもふ、
かなたほのかの流れぼし。

秋の歌

I

はや秋きたり
樹の葉黄金に蝕ばみ、
さだめなき青空
さみしげに梢にかゝる。

とほき地のはて
翼かなしくそよぐ小鳥、

うれひの笛に人をよびて、
「時すでに愛をうばふ」と。

あゝ、夢しげき夏の小徑、
君とかはせし歡樂の
いかに冷く脆きぞや。
残るは遠き「おもひで」の
影なき淵にはこぶのみ。

II

いつしかに落葉ちりしき、

いつしかに夕月さゆる。

地のおもて白く鍍銀し、

嘆く蟲しげきくさむら、

おとろへし柳の影に

幻か、きみのおもかげ……

くろ髪は色あせ、あをく、

骨だちし面おもてにみつむ

力なき腫つとみのなかに

焰ほきえのこるは「死」のみ。

いづこより風やふきにし
ちる柳影をみだして
飛ぶ鳥のごとく身ぶるふ……

いつしかに夢やさめにし、
起きいで、雨戸あくれば
地に落ちしわが身の影の
病む月にかくも瘦やせたる。

電 鈴

鈴ベルがなる、

なる、なる、なる、

家のなかには誰もゐない。

サモワルの沸たぎる音と、

椅子いすの蒲團ふとんにうづくまる

黒い猫と。

鈴ベルがなる、

なる、なる、なる、

あつかましく、

執達吏しつたつりか税務署の役人か、

さては話好きのあの好々爺こうこうやか、

主人は留守だと告げる

婆ばあも今日けふはゐない。

鈴ベルがなる、

なる、なる、なる、

さらさらしく。

HNQFPD!

籠かごの九官鳥きゅうくわんとが、

主人の口ぐせをうそぶく

西伯利亞の田舎の眞晝まひる。

——あるロシアの繪をみて——

番紅花

春をわすれよ、

ほのかに匂ひて、

うちしほむ番紅花ばんこうか。

春をわすれよ。

とほくゆく雁

とほくゆく雁かりなにをなく、
しぐれもよひの夕空に
都の屋根をこえてゆく

むれをはぐれたその一羽、
さみしき羽は音とそよがせて
たそがれ時をなきすぐる。

戀病む身にはまさびしく
その羽は音とにもさしまぐれ、
涙ぐみたる夕空の
鳥のゆくへをながむなる。

ニコライの鐘

鐘はなる、

甘く、すゞしく、あゝ勤行の鐘……

夕月の空香はしく煙りて

ニコライの塔のうへうす紫に

リラの匂ひこめて暮れかゝる、

夕ぐれ、夕ぐれ、

人を待つ身に

鐘はなる、甘く、やさしく、

さて、つれなく、切なく、

戀せよ、夢みよと告ぐるごとく、

ニコライの鐘はなる。

蝙蝠の翼軒をかすめ

金の灯神田の街に瞬き散る。

とほる人 みな美しく

みな幸福をもつごとく

女と男とかたみに肩ふれあひて

わがまへをとほりすぐ。

されど

きみは来らず。

鐘はなる、

甘く、切なく、

戀せよ、夢みよ、一瞬^{いっしゆん}はすぎゆく

と異教の鐘は優しげに鳴りひびくを。

煙草の唄

こゝろともない

煙草のけむり、

浮氣男の心のまゝに

わけのわからぬ

文字をかき……

こゝろともなく

通りに出れば

電車の鈴のやかましく